

## 手遅れ医者

昔から「手遅れ医者」というのがいて、どの患者に対しても「手遅れじゃ」という。近所の人もみんな知っていて、屋根から落ちた人をつぎこむ。また、手遅れゆうやろかと騒ぎながら行く。するとやっぱり、「手遅れじゃ」。……そやけど、今、屋根から落ちたところでっせ。……・「ウム、落ちる前なら何とかなった…」これは落語の枕である。

手遅れじゃという理由は2つある。ひとつは、**万一医療ミスがあっても手遅れ**と言っておけば揉めることが少なくなるだろう、との配慮。……**医師は自分の失敗を棺桶に葬る**、とある人は言う。

もうひとつの理由は、**手遅れの患者をなおしてくれたから名医だ**、という評判を期待しての話。　「医者として困ることは、患者がなぜ治ったかわからないときですね」と言った医師がいるらしいが、アホか。そんなもん、しょっちゅうや。診断まちごて、治療まちごて、それでも治ったら、ありがとう、という。(最近では、ありがとうもよう言えへん患者がふえたけど、子ども以下やな。)……一方、診断が正しく、治療も正しく、こちらが予測したとおり(家族に説明したとおり)の経過で亡くなったら、「あんたのゆうたとおりや。名医やな」などと誉めてくれる家族はいない。

ボクは医者全体の話として悪口を書いているが、基本的には、患者が前にかかっていた医者の診断・治療に関して、余程のことがないかぎり(たとえば使ってはいけない薬を処方していたりとかしない限りは)患者に向かってその医者の悪口は言わない。ある薬を使っておられたとすれば、今のんでいる薬を全部のみ切ってそれでも効かなかったら、今からボクが処方する薬をのんでみてくださいと言う。どうも自分の思っていることと違った判断をしているときでも、首は傾げても、仮に間違っていることがはっきりしていても、生命にかかわらない限りは言葉を濁して沈黙を守る方を選ぶ。

あるとき、思わず何の為の薬だろう?と呟いたことがあって、患者が先方の「大病院の大先生」に言ったらしい。すると次からその薬の処方がなくなったという。これなど、明らかに無意味な投薬である。笑ってしまった。

逆に言えば、前の医者 of 誤診だとか治療ミスだとか、判断ミスだとか、そういうことをあからさまに患者に向かって言う医者がいるということである。なぜ言うかといえば、自分が名医であると言いたいからである。そんなもん、自分がまともなことをしていれば、わざわざ宣伝しなくても患者にはわかるものである。テレビの番組で、どうせ宣伝のため出演している。技術的に天才の外科医がいるらしい。医者 of ぼやきのところで読んだのだが（小生基本的にはこの種の番組は見ない。・・あほらしいから）、前の主治医のことをかなり手ひどく貶（け）すらしい。それだけで、医療技術は見えていないから判断できないが、人格を疑う。 多少の瑕疵については目をつぶろう。しかし、現実には、「人格識見ともに優れた人物」はいくらでもいる。すでに述べているが、わざわざそんなふう to 他人をこきおろすことに力を入れなくてもわかる人にはわかる。 大病院の医者 of 言ったことを鵜呑みにする「大病院病」の人について書いたことがあるが、グズグズ言うなら「その医者、ここに連れて来い！」てなもんです。そのくらいの矜持はあります。・・・・・

**そもそもどの情報を信用しようと、自分（患者自身）の人生なのだから、自分で決定すればいい。**そこまで立ち入ってゴチャゴチャ言う気は端からない。しかし、あとでグズグズと「聞いていなかった」などと言われるのがいやだから、今あることは言います。知っていることは話します。それを信用するかどうか。つまり、どの情報を信用するか、いずれは取捨選択を迫られる。そのときは、**貴方の人生だから貴方が判断すればいい。**・・・それで自分の判断が誤っていたら、また誰かの所為 to しようというのだろうか。それは通らない。

裁判官や弁護士の発想。彼らには社会正義の実現とかはなく、判断の基準は、「法に照らして正しいかどうか」ということがあるのみ。次ぎに「判例があるか」もある。時にそういう世間的な実例が周囲にあるのに（どちらかといえばゴロゴロ転がっているのではないか）気付かず、いわゆる世間体などを考慮にいれないから、判断の基準にしないから、変な判決がでてくる。ある裁判で、弁護士が依頼者に電話で「正義は勝てり！」と言ったら、（自分が勝訴したのに）「すぐに控訴せよ」と答えた人があるらしい。……・ここに医師と学校の教師

(別に述べる機会があるだろうが、)をいれると、「世間知らず」の三羽鳥になる。……そうでなければ、63歳の精神身体障害者の息子を死なせた96歳のおばあさんに「有罪：懲役〇ヶ月」などと戯けたことをいうはずがない。

(「障害者を産むか」にまとめた。)

……昨今、障害児を生むかどうかという議論があつて、重篤な障害児は子宮内で診断がつくことがある。このとき、「倫理的には問題が残るが」人工流産させて生まれないようにする技術もある。イギリスなどでも結構実行されているらしい。「**障害者にも生きる権利がある**」というのは正論で、これには抵抗ができない。TV番組に障害者を記録して放映する。立派に生活している。それでも生んではいけない、という意見も根強い。テレビで、脳性麻痺の女性が去勢したら、と言われたのちに健康な女の子を産んで、この子が不自由な両親の面倒をみる。それこそ人間的だと思うのだが。

……先日、雨で濡れたところで松葉杖の障害者が滑ってドタッと倒れたところに行き合わせた。傍ら(カワ)にいた男性が自分の傘も荷物もほおりすてて助け起こす。きわめて当然の反応である。……ではライオンに追っかけられているときにもそれをするか、という話がある(小生の創作ですが)。アフリカの狩猟民族国家の人が日本に来たとき、「障害者はどうするのか」と尋ねた人がいて、……答えようがなかったらしい。今、この社会・環境だからできることであり、人間である限り助け合いをするのは、また当然なのである。(幾度も繰り返すが、自分たちの常識が世界中の常識ではない。)

障害者を街で見かけたらどうするか。……もっともいいのは、「**好意の見て見ぬふり**」である。先の松葉杖の男性もしまったと思っている。なるべくそれ以上に目立たないようにしたい。そこに、いかに親切であっても「大丈夫ですか、大丈夫ですか？」とくりかえせば、より目立つようになり、彼の望んでいることと相反する。だから、注目するのは一瞬だけで、あとは「知らぬ顔」をするのが親切なのである。

先の96歳のおばあさんは、3ヵ月後、別の裁判官によって「執行猶予」になった。罪をのがれようと足掻いたわけでもないし、息子がいなければ生きていても甲斐がない。その後、数ヵ月して亡くなっていると報道された。

裁判官は、情状酌量しなければいけないときもあるが、不必要なところにま

で反省の態度がみられる（実際にはまったくしていない場合も往々にしてあるのに）とって酌量する必要はない。死刑制度があるのに、「死刑」を申し渡さないのは、明らかな「法律違反」である。いつまでたっても納得のいかない判決が下される原因のひとつである。量刑に不審な点が多いのは彼らの判断の基準が間違っているからである。（別に述べる。）

念の為、「世間」は君が思っているほど、親切ではない。漢字の読みを間違えたり、言葉を間違えて使ったり、敬語を間違ったり、たとえば「もと人食い人種であった方々、野次馬のかた」と言ってバカにされたり、あるいは当然知っていなければならない常識や世間のしきたり、などについて教えてくれることはまずないと思うべきで、ふつうは蔭で嗤うだけである。職場などで、どうしても共通の知識として持っていなければならないことについては、「こんなことも知らないのか」と馬鹿にしながら教えてくれる人はまだ親切な方で、必要なことさえ教えてくれない人も多い。……このあたりのことが、以前にも言った、**自分で恥をかいて覚えなければならないこともある、**ということのひとつである。

知識や技術というのは、本来自らが入手すべきもので、手取り足取り教わるものではない。知識については、いくらでも本がでていて、正確に理解すれば時間さえあればいくらでも増えて行く。耳学問でも自分の知識の空白にあてはめていけばある程度は埋まる。

しかし、技術は違う。**技術は体得するもので、他人の技術を盗むものである。**他人がしているところを観察して（watch or look; see 眺めてではない）ちょっとしたコツを手に入れるのである。このときの質問には答えてくれる人もある。車の運転でも他人がしているのをいくらみても役には立たない。自分でするのが一番である。その細かなテクニックが技術である。さりげない動作で上手下手が決まる。 割烹でおしぼりひとつ渡すにしても微妙な差があって、猿がするのと人間がするのとは違う。わかる人にはわかるのである。それがプロフェッショナルの仕事である。と同時に、他人の技術を盗むためには自分の方もある程度の水準に到達していなければ、その技術の素晴らしさが

理解できない。見た目、鮮やかそうにみえても実は単なるハツタリにすぎないこともあるからである。その見極めが重要であるが、これは伝授できない。これも恥をかいて……の範疇にはいる。

小生、後述するが、**立居振舞拳措動作**とよく言う。人間としてもっとも大切なことのひとつである。

あるとき、昭和の初めに日本剣道選手権が開催されてそのときに優勝した持田盛二範士（のち十段）の稽古の映像を見たことがあるが、流れるような、一種の舞いをみているような気持ちになった。もう、60年も前の映像である。この人でさえ、幕末の頃の剣術とはかなり異なっているだろう。新撰組なんか、本当に凄かっただろうと思う。（別の機会に書く。）ほかの武道でもそうで、極真空手の大山倍達さんは、ダンスをすることは空手の動きにも有効な練習方式だといっている。それほど優雅な身ごなしが要求される。

「**立居振舞拳措動作**」とオレはよくいうけれど、これがその人の所作が優雅かどうかを見極めるのに最適だからである。咸臨丸で初めて米国に渡った時の日本代表の使節は、木村撰津ノ守である。今見ると、日本人の典型で、米国人からみればチンチクリンである。しかし、侮られることなくむしろ尊敬をうけた。その根底に儒教があり武士道があり、先の立居振舞いにおいて、少しも恥ずかしいと思われるようなことがなかったからである。夏目漱石は、英国で Inferiority Complex（劣等感）に苛まれた（#イマタ）そうであるが、それでも一生懸命日本の良さを探そうと努力した。

上品とか下品とかいうけれど、その人のもっている雰囲気というのがあって、いくらお上品そうに話されてもすぐにわかる。器量造作をいうのではなく、歩き方ひとつみても雰囲気を感じるのである。優雅さ・典雅さをもつためには、ひとつにはもって生まれたもの、ひとつは家庭のしつけ、そしてもうひとつは、本人の努力である。そうであろうと努力することである。

（1999年離れた所にいる娘に書いた手紙である。それに最近の話題を一部追加して改変した。）

2007. 03. 10.